

- (4) 「引用による本文構成についての覚書 —『好色酒吞童子』を例として—」  
廣部俊也，縦版 pp.19-33

## 19世紀学研究

研究代表者 桑 原 聡

プロジェクトメンバー

桑 原 聡 (代表者)  
逸 見 龍 生  
吉 田 治 代

本コア・ステーション “Institute for the Study of the 19th Century Scholarship” は、これまで同時期に設立した19世紀学学会の事業とあわせ、今日における学知の基礎が19世紀に確立したとする見地から、「19世紀学」を総合的に再検討する作業をすすめてきた。主な活動としては、学内外の研究者によるシンポジウム・研究会の開催と、紀要『19世紀学研究』の発行が挙げられる。

2014年度は、以下の通り、学術講演会とシンポジウムを開催した。

1. 日時 2014年11月28日 18時15分～20時  
場所 新潟大学五十嵐キャンパス 総合教育研究棟大会議室  
学術講演会 日下元及「ナイジェリア文学における歴史認識と民族問題」\*
2. 日時 2014年12月19日 18時～20時  
場所 新潟大学五十嵐キャンパス 総合教育研究棟D201  
シンポジウム 「知の饗宴（インテレクチュアル・バンケット —ルネサンスから初期近代にいたるヨーロッパ思想の水脈）\*\*

第1報告 ヒロ・ヒライ

「生きている粒子の謎 —ゼンネルト、ガッサンディ、キルヒャー—」

第2報告 池田真治

「ライプニッツの原子論」

第3報告 久保田静香

「ペトルス・ラムスとフランス語 —16世紀フランスにおける古代ガリア称揚の動きを背景に—」

第4報告 田邊まどか

「ゴンゴラの『孤独』第一部（1613）における大航海批判 —文学とイデオロギー—」

\* 新潟大学人文社会・教育科学系，人文学部，「19世紀学研究所」と共催

\*\* 新潟大学人文社会・教育科学系，人文学部，「19世紀学研究所」，および新潟大学人文学部哲学・人間学研究会と共催

2013年度より，いわゆる「長い19世紀」の見地から，時間軸を長めにとり，19世紀学をあらためて位置づけ直そうと，これまでとは志向のことになった講演会なども実施してきた。上記の企画では，時間的には初期近代ヨーロッパの思想・文学から空間的にはアフリカ大陸まで，多岐にわたる主題を取り上げ，議論を深めていった。報告タイトルからもうかがえるように，特定領域にとどまることなく，専門領域の垣根をこえ，学際的な交流，成果を生み出すことができたと考える。

『19世紀学研究』第9号（2014年3月刊行）は，特集「アタナシウス・キルヒャー」と投稿論文・書評を含み，例年以上に充実した内容を持つものとなった。目次は以下の通りである。

[特集] アタナシウス・キルヒャー

桑原 聡 「特集趣旨」

桑原 聡 「キルヒャーとクンストカンマー」

坂本貴志 「キルヒャーの古代神学的宇宙論 — 『普遍的種子』と『シナのイシス』」

伊藤博明 「キルヒャーとオベリスク」

前田良三 「アタナシウス・キルヒャーと可視性のメディア —メディア文化史的注記」

[論文]

- ・中島浩貴 「ドイツ第二帝政期の軍隊内部における一般兵役義務をめぐる言説 1871～1914 —自己正当化から軍事的合理性の追求を中心として」
- ・Takaoki MATSUI, Zur Erheiterung der „ernsten Dinge“ : Physik, Politik und Optik im Totenkult von Goethes Wahlverwandtschaften

[書評]

- ・池田嘉郎, 木畑洋一・南塚信吾・加納格 『帝国と帝国主義』(研究会「戦後派第一世代の歴史研究者は21世紀に何をなすべきか」編『21世紀歴史学の創造』第4巻, 2012年, 有志舎)

[活動報告]

このようにシンポジウム・研究会でえられた成果の多くは、年1回発行している『19世紀学研究』で活字化されている。また、19世紀学学会の会員が、19世紀学に関連する研究を発表する機会を設け、学術的意義が認められるものについては、『19世紀学研究』への投稿をうながし、査読の上、広く社会へと発信した。